説教20210110　ルカ3:15-22 200 21-69 259

「あなたはわたしの愛する子」

キリストよお越しください、弟子たちの中に立ち復活のみ姿を顕されたように、私たちの内にもお臨み下さい。

　先週６日は主イエスの顕現日でした。主イエスはこうしてこの世に来られ、私たちは今降誕節のただなかを主イエスと共に歩まされています。主イエスは背丈も伸びて、いよいよ神の救いを得させるための、悔い改めの洗礼が宣べ伝えられることになります。洗礼、バプテスマという言葉は、この時初めて、ザカリヤの子、ヨハネに下りました。洗礼という言葉や概念は旧約聖書には見られないのです。では神の民は、それまで何に救いを求めていたのか、と言いますと、それは先週お話ししましたように、エルサレムにある神の神殿であり、神の民は救いを求めてエルサレムへと巡礼の旅へ出たのでした。ヨセフもマリアもイエスも連れだってエルサレムへとのぼったのです。つまり、旧約時代にはエルサレムに巡礼するという慣習があって、そこに人々は救いを求めていたのですが、洗礼者ヨハネが現れてから、新たな時代が始まり、人々は洗礼を受けることによって救いにあずかることが出来るようになったのです。言うまでもなくその洗礼の慣習は今の教会にまで継承されていることであります。

　ですから、今日お話しします、洗礼に人々が預かり始めたという出来事はとても画期的な出来事で、それは主イエスがこの世に公に顕れて、神の国を宣べ伝え始めるときを得て、今まさにはじめられたのです。

　神の時、神のみぞ知るタイミングは、私たち人間にははかり知ることが出来ません。洗礼がはじめられた時というのも、まったく神様の事情によることで、私たちがどうこうできるという事ではありませんでした。主イエスは背丈も伸び、いよいよ神の国の福音を宣べ伝え始められますが、まず神の言葉は人間ヨハネに下ったのです。「荒れ野で叫ぶ者の声がする、・・・人は神の救いを仰ぎ見る」という有名なイザヤ書のみ言葉がヨルダン川に居たヨハネによって実現されようとしたのです。ヨハネは群衆たちにヨルダン川で洗礼を授けました。群衆たち、というのは多くの人達ではなかったでしょうか、そこには徴税人も兵士もいました。人々はエルサレムに巡礼することに代わる、新たな救いの道を探し求めていたのでありましょう。ヨルダン川でヨハネによって多くの人々が洗礼を受けたという出来事は歴史的に見れば、一つの民衆運動であったと言えるでしょう。

　このヨハネによる洗礼は水による洗礼でした。洗礼というのは、洗礼式の時のことを思い出していただければわかりますように、必ず、水と聖霊とが伴います。ですから水のみの洗礼というのでは、不十分なのです。主なる神は、まず洗礼者ヨハネを遣わして、人々に不十分な水だけの洗礼を授けました。しかしこのことは逆に、洗礼が全きことになるまでの過程が、まったく人間だけの業では成し遂げられないという事を物語っています。私たち人間は神から聖霊を授かるのですからそれは当たり前なのですが、それにしましても主なる神のこのお計らいには感謝するばかりです。

　私たちは、今の世にあって、全てが人間業で成し遂げられることのおぞましさに気づきつつあるでしょう。神に委ねることの安心、平和を私たちは心から得たいと願っています。しかし、その神に委ねる安心、平和がなかなか得られていないというのはどういうことなのでしょうか。一つにはそれは今のこの騒々しい世の中にあって、私たちが神の時を待ちきれないことにあるのではないでしょうか。神の時を待ちきれないものですから、私たちは時に神様抜きで、人間だけで判断したり、行動してしまうことがままあります。そうしますとますます、神による安心、平和は私たちから遠ざかってしまうのです。

　今日の聖書箇所にもそのような人間の待ちきれない性急さが描き出されています。１５節「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。」この目の前にいるヨハネという人がメシアであってほしい、というのは民衆の人間的な願望であります。民衆にとっては、この目の前に居て、触れることもできるヨハネという人が救世主、メシアであるほうが、よほど手っ取り早くてしかも確実だと思われたことでしょう。

　ところで、水による洗礼というのは私たち人間にとって、入り口として大変受け入れやすいのではないでしょうか。例えば、日本のお寺さんですとか、神社の境内に入る時も、まず入り口にある水場で手をすすいで洗い清めてから奥のほうへと向かいます。又、実際、手を水で洗うことによって、そこに居たばい菌や雑菌を洗い流すことも出来ます。洗礼者ヨハネが先ず水による洗礼を始めたのは、このように万人に受け入れやすい形を、主なる神が配慮されたからではないでしょうか。

　そもそも水というのはこの世にあまねく偏在している物です。太陽が照り付ける灼熱の砂漠の真ん中に居たとしても、そこには水があります。なぜなら私たちの体の半分以上は水で出来ているのですから。水は、私たちがこの世で、最も慣れ親しみ、かつ不可欠である物のうちの一つです。

　水による洗礼の予型は旧約聖書にも記されています。例えば出エジプト記には「その水でモーセ、アロンおよびその子らは、自分の手足を清めた。」というように水による清めの儀式が記されております。

　では、この水による洗礼の次に来るのは何なのか、が私たち人間にはとても大切です。それは１６節に書いてある通り、聖霊と火による洗礼であります。ここで誤解を避けるためにご説明しておきますと、この火というのは聖霊の有様のことを言っていますので、言い換えれば火のような聖霊という事になります。洗礼というのはあくまで水と聖霊によりますので誤解のないようにお願いいたします。

　火のような聖霊、そもそも聖霊というのは今、目に見えませんので、このように聖霊を火に例えて語るのも大変分かりやすいことかと思います。火というのは、クリスマスの時ともされたローソクの炎のように確実に管理されたときは有用ですが、いったん無秩序に置かれますと、それは猛威を振るい、私たちの命を奪うこともできる恐ろしい者であります。１７節の「そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」という言葉は、その火の持つ恐ろしい側面を物語っています。脱穀場というのは麦打ち場ともいわれますが、この麦を打って実ともみ殻を分けて、もみ殻を風で吹き飛ばしてえり分ける、という場面は、人間が試練を受けて、打ち砕かれることのたとえとして再三聖書で語られております。神から試練を受けてそして打ち砕かれるという体験は、火の中を歩むように激しくてつらい体験であります。

　火の洗礼だけでは私たちは到底神様についていけないことでしょう。ダニエル記には火の燃える炉に入れられても平気だった３人のことが記されていますが、今の私たちはそういった試練を受けるとき、水による洗礼を思い起こしたいと願います。水は火を消し、収めることが出来ます。

　さてこのような神から受ける人間の試練も、火による鍛錬という表現で聖書には記されています。ヘブライ人への手紙/ 12章 11節「およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。」

　さて主なる神が先ず、目に見える水による洗礼を配置し、それから、火のような聖霊による洗礼を配置された、そのご配慮が少し分かって来たように思われますが、それにしましても、ヨハネの口から、後にくる主イエスのことを予言された民衆たちは、この予言をどう受け止めたのでしょうか。せっかくヨハネから水による洗礼を受けたのに、いわばそれは本番ではなかった、私たちはまだ、救いに至る本物の洗礼を待たねばならないのか、と多少がっかりしたのではないでしょうか。

　しかし、洗礼の宣べ伝えをこのように二つの段階に分けられた神のご配慮には大変深いものがあるように思います。洗礼は、私たちが主イエスと一致して、同じものとされ、よみがえりの命にあずかっていくことですが、洗礼を授けるにも神と人間との双方の業が必要とされています。

　もし仮に洗礼者ヨハネが最初から水と聖霊との洗礼を授けられたとしたら、洗礼は完全な人間の業となり、その意味は失くなってしまいます。又、もし、洗礼が主なる神の御業だけで成し遂げられ、そこに人間の業が関われないならば、洗礼という事がこの世にある教会の慣習となって、今にまで続けられることはできなかったでありましょう。

　ここで水だけの洗礼にとどめられて、主イエスの顕れを待ち望むことになった民衆たちの姿は、今の私たちにも相通じる姿であります。私たちが自分の口を用いて、隣人に「洗礼を受けませんか」と言わなければ、神から委ねられた洗礼の御業は成し遂げられることはありません。洗礼者ヨハネの役割は今の私たちが洗礼に関して主なる神から託された役割でもあるのです。

　ところで洗礼者ヨハネ自身は、すでに火による洗礼を受けていたかの様な、激しい一途な性格の人でありました。そのヨハネの行状は「常に真理を語り、恐れなく悪を責めた」と記されています。ご存じのようにその様なヨハネはへロディアのことでヘロデから首を切られ天に召されたのであります。

　そしていよいよ主イエスがやってこられます。今日の週報には長めに「今日の聖句」を記しましたが、それはそれ以上省いて短くすることが出来なかったからです。イエスは民衆のところにどのようにやってきたかと言いますと、それは、民衆と同じように、民衆に習って、自らもヨルダン川に入って洗礼を受けられたという事です。その主イエスの姿を民衆たちは目の当たりにしたのではないでしょうか。ここには「言葉は肉となって私たちの間に宿られた」というみ言葉が実現した一つの情景、ワン　シーンが記されているのです。この節はとことん目に見える形を書き記されます。「天が開け、聖霊が鳩のように目に見える姿でイエスの上に下ってきた」とその情景は記されています。そして「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という天からの声が実際に聞かれたのであります。

　今このような情景や天の声は隠されていて、私たちは最後の時にそれに出会えることを信じるしかありません。或いはそれを信じることで十分なのです。

　私たちは、主イエスがヨルダン川で、私たちと同じように罪を赦されるために洗礼を受けられ、私たちと同じ人となられた情景を、折に触れて思い起こしたいと願います。そして主イエスから託されました、その、洗礼を勧めて、授けていく技を、最後まで行っていまいりたいと願います。

お祈りいたします

天に居ます私たちの父

あなたは最愛の御子イエスキリストを私たちのところに下され、私たちと共に歩ませて下さいます。私たちと同じように洗礼を受けられ、罪の内にある私たちの低きに下られた主イエスとともに、私たちも神の子とされました幸いを思い、感謝と賛美を捧げます。

来るときに私たちが主イエスのお姿に対面するにふさわしくありますよう、私たちはこの世で日々心を高く上げ御心を行っていくことが出来ますように。

東北・北陸地方で降り続く雪のために、住まいの中でも危険を感じて過ごしておられる方々を覚えます。どうか、その方々が孤立することなく、必要な援助の手が差し伸べられますように。どうか、絶えずあなたのお守りと励ましが与えられますように。あなたが彼らを救い出してくださいますように。

今、世界は新型コロナウィルスの蔓延の内に置かれています。そのような中で私たちはあなたに寄り頼み、動揺することなく、心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、知恵を尽くして、隣人を愛していくことが出来ますように。

病にかかった方々、又病院で献身的に働く方々が、あなたの祝福によって守られますように。

世界の諸教会を覚えます。私たちは教会の体であり、教会を離れることはできません。今教会に来られないでおられる方々が、必要な時に教会に来ることが出来ますよう、私たちの心と体をみ言葉で養って下さいますように。

父と聖霊とともに